



2020年12月1日着任

岡崎 圭一

おかざき・けいいち
計算科学研究センター
准教授



2020年12月1日付けで、計算科学研究センターの准教授に着任しました。2016年に特任准教授（若手独立フェロー）として分子研に来ましたが、さらにお世話になることになりました。専門は生物物理で、分子シミュレーションを始めとした理論・計算手法で、生体分子マシンの機能発現ダイナミクスの研究をしています。共同研究等を通じて研究の幅を広げたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

覽古考新28 | 1995年

分子研の特徴の一つも組織が比較的小さいことだと思います。小さな組織には、運営上の小回りが利くことのほかにも、構成員のお互いがいろいろな面で融通しあいながら仕事をできること、構成員同士の密接なコミュニケーションが可能なことなどの長所があると思います。そして、分子研はこれらの長所を活かしながら発展してきたと思います。ところが私が在籍していた間に、これらの長所を活かそうという雰囲気が失われてきたような気がします。たとえば、他のグループの研究に対する関心の低下、共通利用の施設や装置を大切に融通しあって使おうという意識の低下などが感じられます。これらの原因は、分子研の組織が大きくなってきたことなののでしょうか。それとも、所員の世代が変わってきたことなののでしょうか。

人の入れ替わりが激しい分子研では、私のように8年半もいると古株になってしまいます。10年もたたないうちに構成メンバーがほとんど入れ替わってしまうのですから、20年30年勤続の教官が珍しくない大学とは違って、分子研は本質的に変化してゆくものだと思います。伝統や慣習にとられることなく、新しい手法で新しい分野に切り込んでゆけることは、分子研が世界の一流の座に居続けるためにはきわめて重要なことだと思います。しかし同時に、せっかくの良い伝統や習慣があつと言う間に失われる可能性もあるように思えます。先人たちが築いてきたものを越えて進んで行くためには、良いものは守ってゆこうという努力を他の組織以上にしなければならないと思います。変わりながらも良いものは守ってゆくという姿勢が、今後の分子研発展の一つの鍵になるのではないのでしょうか。

分子研レターズ No.33「分子研を去るにあたり：変わりゆく分子研によせて」(1995年)

高柳 正夫（東京農工大学助教授）